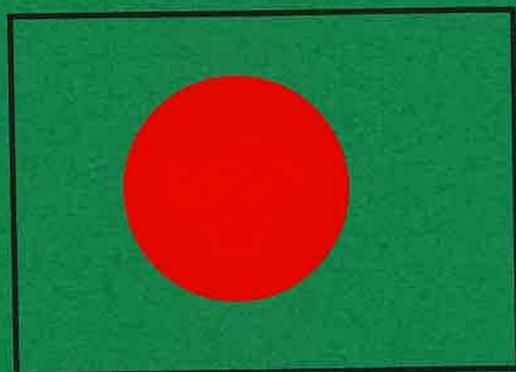


第 37 回

ACEF スタディツアー

2009 年 8 月 6 日 ~ 20 日





第 37 回

ACEF STUDY TOUR 報告書

《目次》

1. はじめに
2. スタッフ紹介
3. メンバー紹介
4. 2週間の日記
5. ランキング
6. 報告文
7. 編集後記

～ACEF と BDP～

1971年に独立したバングラデシュはアジアの発展途上国の1つですが現在、国を挙げての新しい国造りに励んでいます。しかし、識字率は未だ低く、政府の統計においても49%です。新しい国造りに「教育」が欠かせないものであることは、言うまでもありません。

明治初期、アメリカからの宣教師が、日本の教育（特に女子教育）を始め日本の近代化に大きく貢献したように、今、バングラデシュで最も必要なことは初等（基礎）教育です。

1990年5月ミナ・マラカール女史は、バングラデシュの首都ダッカ郊外において、初等教育に取り組むキリスト教系NGO「サンフラワー教育計画＝SEP（現BDP）」を創立しました。このマラカール女史の呼びかけに応じて、アジアキリスト教教育基金（ACEF＝エイセフ）は、バングラデシュの子どもたちに「寺子屋を贈ろう」と1990年10月に発足しました。

～スタディツアー～

ACEFスタディツアーの特徴は、学生が中心ですが、様々な年齢層も加わり、朝夕の礼拝、そして子どもたちなどと遊び、夕礼拝の後でシェアリング（その日にあった事を共に話し合う）をすることです。日本における日常生活では、立ち止まってじっくりと「人生の意味や目的」を先輩の方々と交えて語り合う事など稀ですが、激動のバングラデシュにあって、静かに聖書からの語りかけに耳を傾けながら、語り合い、祈り合いつつ、自らの生き方に思いを馳せる毎日です。本当にすばらしい事です。

このスタディツアーの中から、大学院、留学を経てアジア研究者になった方、JICAなど国際協力機関で働いている方など、多くの人材が生み出されています。また、この国を訪れた幼稚園、小学校、中高、大学の先生方は、「教育の原点」を見たと言い、多くの方々が、「日本ででの生活はこれでいいのか」と問いかけられたと言います。

みなさん、アジアでの"生"を体験し、21世紀の私たちの生き方をもう一度考えてみませんか。ぜひ、スタディツアーにご参加ください。

《バングラデシュ概要》

●基本データ●

国名	バングラデシュ人民共和国 গণপ্রজাতন্ত্রী বাংলাদেশ
首都	ダッカ
国歌	我が黄金のベンガルよ by ラビンドラナート・ダゴール
国土面積	144,000km ²
人口	152,221,000 人 (世界第7位) (2008)
民族	98%—ベンガル人、 その他—非ベンガル人ムスリム、モンゴロイド系先住民族
公用語	ベンガル語
略史	1947年8月14日 パキスタン(東パキスタン)として独立 1971年12月16日 バングラデシュとして独立
宗教	イスラム教83%、ヒンドゥー教16%、 その他(仏教、キリスト教、無神論)1%

●政治●

政体	共和制
元首	ジリウル・ラーマン大統領
政府	首相：シェイフ・ハシナ

●経済●

主要産業	縫製品産業
通貨	タカ
実質 GDP	684 億ドル (2007 年度、世銀)
一人当たり GDP	487 ドル (2007 - 2008 年度、バングラデシュ中央銀行)
経済成長率	6.2%(2007 - 2008 年度、バングラデシュ財務省)
GDP 内訳	サービス業(49%)、工業・建設業 (30%)、農林水産業 (21%)

●地理・気候●

気候	熱帯モンスーン気候 (4~9月の雨季と10~3月の乾季が特徴) 雨季には国土の3分の1が水に覆われ、洪水が繰り返され、 約10年に1度の周期で大洪水が襲う。
地形	ガンジス川、ブラマプトラ川、メグナ川によって形成された 世界最大のデルタ地帯。ベンガル低地が特徴。

第37回(2009夏)ACEFスタディーツアー参加者

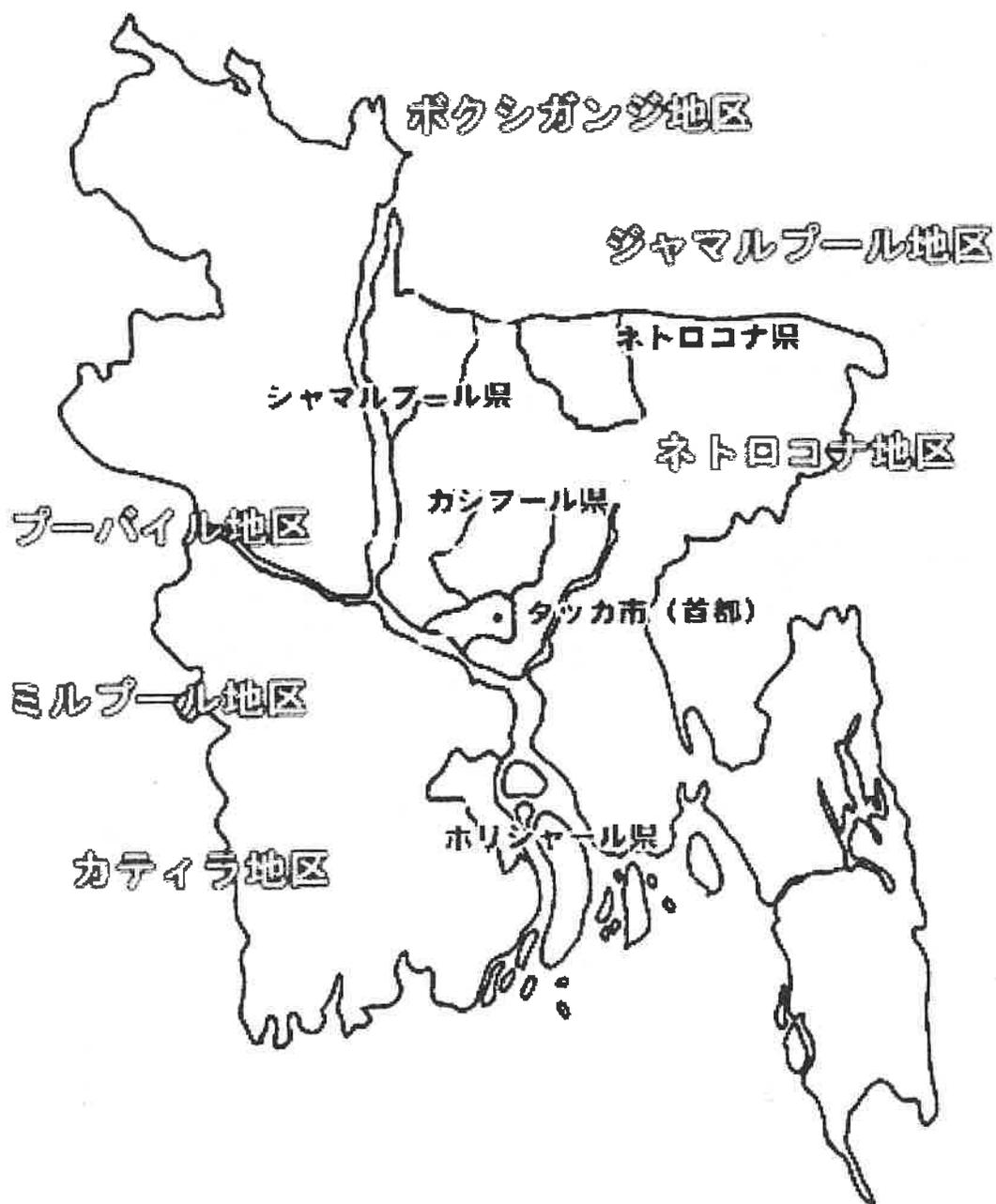
Aチーム(ジャマルプール地区)

1	中川 英明	Nakagawa, Hideaki	M	ACEF事務局長	国際基督教大学教会
2	高崎 和子	Takasaki, Kazuko	F	ACEFバザー委員長	所沢みくに教会
3	上野 峻一	Ueno, Shunichi	M	青山学院大学4年	自由ヶ丘教会
4	加藤 講太郎	Kato, Kotaro	M	早稲田大学4年	野方町教会
5	吉富 貴恵	Yoshitomi, Takae	F	東京女子大学3年	
6	高橋 和可乃	Takahashi, Wakano	F	東京女子大学1年	
7	中島 悠貴	Nakashima, Yuki	F	青山学院女子短大1年	
8	守屋 美左子	Moriya, Misako	F	東京女子大学1年	
9	国吉 舞美	Kuniyoshi, Maimi	F	国際基督教大学1年	

Bチーム(ネトロコナ地区)

1	井上 儀子	Inoue, Noriko	F	ACEF事務局	浦和東教会
2	山下 真実	Yamashita, Makoto	M	横須賀学院小教諭	川越国際キリスト教会
3	井上 京子	Inoue, Kyoko	F	東京女子大学4年	
4	諸橋 亜矢	Morohashi, Aya	F	津田塾大学3年	
5	西田 愛	Nishida, Ai	F	東京女子大学3年	カトリック北浦和教会
6	矢野 綾都	Yano, Ayami	F	聖和大学2年	
7	田中 衣里	Tanaka, Eri	F	東京女子大学1年	
8	中道 綾乃	Nakamichi, Ayano	F	青山学院女子短大1年	
9	高杉 春輝	Takasugi, Haruki	M	東奥義塾高校1年	

バングラデシュ MAP



ダッカ ～Dhaka～



アルバートさん

厳しく優しい、みんなに頼られるBDPのボス。そんなボスも普段は冗談を言い過ぎて、どこまでが本当か分からない、ちょっと変なおじさんギタリストに大変身！

1

ファルークさん

スタッフから絶大な信頼を得るBDPのナンバー2。いつもはチョット眠そうな顔、なのにしゃべるしゃべる！



ヘモントさん

日本とバングラを愛する歌の先生、あだ名はヘモちゃん！
Bチームと共にメトロコナに同行。ヘモちゃんのおかげでBチームは美声になったとかならないとか。

ディコさん

音楽好きのベンガルAボーイ。

Aチームと共にジャマルプールに同行。絶大な影響力でAチームのメンバーは全てがディコさんに似てきたとか…？



ニキルさん

激しい運転と爽やかな笑顔で、Aチームの移動を担当！

休憩時間は携帯で2人の子供の動画を見ている心優しい

Aチームの兄貴。

オシムさん

お茶目でやさしい気合満点の暴走ドライバー。Bチームの移動を担当！カルチャーショーの鬼の帽子が似合すぎてるBチーム屈指の役者。



プーバイル ~ Pubail



オモルさん

「ミナサン！ゴハンデスヨ〜!!!」と笑顔でご飯の時間を知らせてくれるオモルさん。かわいい息子×2とかわいい奥さんを持つ楽しいお父さん。



ラハジさん

バイク大好きな会計係。いつもみんなを笑わせてくれる。B チームの劇「アームミヤ」のお手本を見せてくれた名監督。



アリさん

ひげの似合う恥ずかしがり屋のノリノリダンサー。癒し系の笑顔でみんなも元気に！スポーツのときは子供そのもの！

職業訓練学校



プロカシュさん

電気のことならお任せ！
生徒から大人気の頼れるイケメン先生。



ルナさん

パソコンだけではなく、お洒落もデザインも何でもできるみんなのアイドル。

ロチョンさん

ガロ族の心優しいメカニック。バイク姿がとっても似合う。

只今、日本語を猛勉強中！



マーたち

毎日ご飯を作ってくれた
縁の下の力持ち！
カレー嫌いをカレー好き
にするほどの腕前。

ジャマルプール

モクレス

BDP の仕事に誇りを
持つジャマルプールの
ボス。笑顔がかわい
く、ちょっとモタな中間
管理職！



モタレフさん

現在婚活中、シャイなイケ
メンテイカー。食べ物が
なくなるとうれしそうにご
飯を勧めしてくれる。おかげでチョット
食べ過ぎたあ。

~Jamalpur~

バシエツトさん

笑いのために体を張る。たくさん歌
を歌ってくれる。特技は「声を出さな
い爆笑」。



ツアー中に娘の名前を決定！！

ホビさん

勤勉で、素敵なスマイル持つ
お世話好きのホビさん。その
笑顔は言語を越える！



フロミン

お目目の大きなジャマルプー
ルオフィスの管理人さんのお
孫さん。かわいい顔して未来は
女ジャイアンか！？



ネトロコナ ~Netrokona~

ハビブさん

ネトロコナのボスは超強面。でも
実は世話好きのナイスリーダー。
残念ながらご飯を勧めていると
き、彼の耳には「アールナ」は聞こ
えない……。



ヤシンさん

はじめは笑ってくれなかったヤ
シンさん。

日に日に笑顔が増え、最後は
ネトロコナの癒し系に！



アナロールさん

クール、イケメン、優しいと三
拍子そろったケアテイカー！
ちょっとシャイだけど女の子
のアイドル。みんなお熱をあ
げたけど、実は若パパ。残
念！

ルジナ

Bチームのアームミヤのファン
の一人。10歳前後にも関わら
ず、学校を休んで一所懸命子
守、手伝いをする姿に、心から
のレスペクト。そして感謝。



和子さん

やさしくて面白い頼れるお母さん。みんなをまとめてくれた、バングラの達人



中川さん

いつも冷静沈着、頼れるボス。

たくさんのことを教えてくれました。オールマイティー。



しゅん

みんなを気づかい、ぐいぐいひっぱってくれたお兄さん。子供大好きで芸術者。



のりこさん

きらきらした笑顔がすてきなみんなのマザーベنگル語ペラペラ。だじゃれのセンスも素晴らしい。

メンバー

かとちん

アクロバットな技。暑さやわらくギャグセンス、そして汗。みんなから慕われています。



たかちゃん

どこを取っても可憐な大和撫子。

バンガリもメロメロまいみん

なみんなの憧れ。

ある日突然踊りだした癒し系の女の子。隠された魅力は未知数！みんなを癒してくれました。

ゆっきー
はじける笑顔でみんなを元気にしてくれました。アクティブで子供にも大人気。

わっさん

とても優しい。そしてしっかりもの。目が大きく、よくバンガリーだと思われてきました。

みさこ

元気印のバンガリキラー。積極的ですぐバンガリにうちとけられる。

積極的ですぐバンガリにうちとけられる。

バンガリにうちとけられる。

にっしー

穏やかお姉さん。優しく、一緒にいると落ち着きます。何でも淡々とこなす。実は裏ボス。



はるき

最年少の高校一年生。青森弁でみんなの心をつかんだ弟的存在。



あや

強くやさしくおもしろいみんなの姉御。感情豊か。逢上国の教育に関心が高い。



きょーちゃん

何事も情熱的に全力投球!

いつもみんなを楽しませてくれたのりのりダンサー、ムードメーカー



大集合!



ポニョ

関西弁+ベンガル語+癒しのオーラ。ベンガル人も認めるバンガリー。



のん

とにかくかわいい女の子。ほんわかして見えて、常にしっかりした目で物事を見つめていました。



えり

クールと思いきや天然マイペースでおもしろい。かつ、謙虚で気配り上手です。



まこっちゃん

穏やかで愛にあふれる先生であり、みんなを癒すギタリストでもあります。

子供に使えるベンガル語

文責 矢野綾都

ケモナチョ? (元気?)

アマール ナム ○○ (私の名前は○○です。)

アムラ ジャパン テケ エシェチ (私たちは日本から来ました。)

アミ チャットロ/チャットウリ/シッコク/シッキカ (私は男子学生/女子学生/男教師/女教師です。)

エコン テケ ガン コルボ (今から歌を歌います。)

アマデル ショング ガン コロ (私たちと一緒に歌ってね。)

ショバイ (みんなで)

エクショング (一緒に)

ケラ コロ (遊ぼう)

ナチ コロ (踊って)

デコ (見て)

ショノ (聞いて)

ジャオ (行って)

アショ (来て)

タマオ (止まって、やめて)

ダラオ (立って)

ボショ (座って)

ディオ (ちょうだい)

ニオ (あげる)

ブジ ナ (わからない)

ジャニ ナ (知らない)

ジャノ? (知ってる?)

バロラゲ (好き)

バロラゲ ナ (好きじゃない)

ベタ (痛い)

コティン (難しい)

ショホジュ (簡単)

エキ (同じ)

クシ (うれしい)

アノンド (楽しい)

ドウツキト (悲しい)

バロ ゴンドウ (いいにおい)

ショブ (全部)

ダン (右)

バム bam (左)

アパール (もう一度)

ポレ (後で)

ショカル (朝)

ビカル (昼)

ラト (夜)

アズ (今日)

アガミカル (明日)

ゴトカル (昨日)

バイ (兄弟)

ボン (姉妹)

ボンドウ (男友達)

バンドウビ (女友達)

ジャティオ ポタカ (国旗)

ショブジュ (緑)

ラル (赤)

→バングラの国旗の色

シャダ (白)

→日本の国旗の色

ロン (色)

第37回(2009夏)ACEF スタディーツアー日程表

Date	Time	Activities	
8/6	am	—	
	pm	成田空港発	
8/7	am	ダッカ着、プーバイルオフィス到着、オリエンテーション	
	pm	Arongで買い物	
8/8	am	モニプール、ラルクティーBDPスクール訪問	
	pm	ルナさん宅訪問、散歩	
8/9	am	礼拝出席、職業訓練学校訪問	
	pm	ボートトリップ	
8/10	am	バシヤニア、ショモシンBDPスクール訪問	
	pm	ヒンドウー教コミュニティ訪問	
チーム別		A team (ジャマルプール)	B team (ネトロコナ)
8/11	am	移動	移動
	pm	子供たちと散歩	お宅訪問
8/12	am	ノルクリ、モホンプールBDPスクール訪問	ベタティ ジェレバラBDPスクール訪問
	pm	市場へ行く	ショアリカンダBDPスクール訪問
8/13	am	ダボネショールスクール訪問	川を渡ってノアパラセンター訪問
	pm	ソーラン節の練習など	パトゥリBDPスクール訪問、 ヘモントさんのベンガルソング講座
8/14	am	ボクシガンジへ移動	サリー、メンディー、スクールの先生のお宅訪問
	pm	ミニカルチャーショー、インドとの国境を見る	ヘモントさんのベンガルソング講座
8/15	am	free time	ヘモントさんのベンガルソング講座
	pm	ボートトリップ	ガロ族のアカデミースクール訪問
8/16	am	ジョカ、ランゴルジュリBDPスクール訪問、 市場で買い物	シムラティ BDP スクール訪問
	pm	サリー、メンディー、ベンガルカット	子供たちと交流
8/17	am	移動	移動
	pm	A, B合流。カルチャーショーの練習など	
8/18	am	市場で買い物	
	pm	カルチャーショー	
8/19	am	最後のシェアリング	
	pm	Wrap-up meeting, サイフルさん宅訪問、プーバイルオフィス出発	
8/20	am	ダッカ発、香港経由	
	pm	成田空港着	

8月6日(木) きよーちゃん

未知の国へ行くという興奮、慣れない団体行動への緊張、前日の夜はなかなか寝つけなかった。成田エクスプレスに乗ると、少しホッとしてうたた寝を始めた。夢の中でも、唱えた『遅刻をしない!』。そして、到着第一ターミナル。見事に集合場所の第二ターミナル通過。私は最も恐れていた遅刻をした。成田空港で初めて猛ダッシュをした。脱帽して謝った。この場を借りて改めて、ごめんなさい。それにしても、みんなの顔を見た瞬間に、すごく安心した。準備会で一度会っただけなのに、みんなにとっても親しみを抱いた。香港の空港にて、日本に長く住む、ベンガル人のおじちゃんとの会話を楽しむ。そして、ついに到着、バングラデシュ。和子さんとBDPのスタッフの方々たちに迎えられ、とてもわくわくした気持ちになる。道路に裸で寝ている2人の赤ちゃん、物乞いの子供たちがいた。目の前の現実をうまく受け止めることができなかった。人生において大切なものを見つける旅が始まった。



8月7日(金) 和子さん

無事ダッカ空港に到着 01:55 皆の顔は嬉しさと睡魔と戦う顔でした。BDP スタッフの迎を受け一路宿舎ブパイルへ。お互いに簡単な自己紹介。3時過ぎに床につく。



バングラでの初めての食事 ルティ トルカリ パナナ ゆで卵 チャー
開会礼拝 テサロニケの信徒への手紙 5 16~18 井上儀子さん担当
オリエンテーション BDP スタッフ

アルバート ファルーク ヘモント アムロス デイコ
買い物 ウットラへ 沢山の買い物をして帰路に着く。



8月8日(土) みさこ

オモルさんとケモナチエン?をひたすら繰り返しています。

今日はラルクティBDPスクールとセンパラBDPスクールに行きました。私が歌集を手に持っていたら子供たちに

貸してといわれました。英語の授業中にもかかわらず女の子3人が「しあわせなら手をたたこう」の1～3番を分担してノートに書き写す姿は、提出物の期限が迫っているが故にお友達にノートを見せてもらう私の姿に似ていました。かちんと子供たちにアルプス一万尺を教えた後、授業が再開してからも、私たちが廊下でニキルの運転する車を待っている間もずっとこっちをみてアルプス一万尺をしてみせてくれる男の子がいました。嬉しかったのですが彼は先生にみっちり怒られていました。

8月9日(日) ゆき

今日一日を通じて「バングラデシュ好きだ!」と強く感じた。文化や自然に触れられた気がする。まず、午前中に厳格な雰囲気のカトリックの礼拝へ行き、午後にはヒन्दウー教の村の寺院へ行った。また、「ムスリムは持ち物をほめられたらそれをあげる習慣がある」と聞いた。こうして、宗教がひとつの国に数多く存在し共存することはすごいことだと思った。



夕方はボートトリップをした。一面に広がる緑や近く感じる入道雲や牛をひく人々や私たちをみる子供たち…言葉にならないくらい綺麗で落ち着いた。そして、街では「ケモナチエン?」と挨拶すると笑顔で返事をしてくれた。心地よい、気持ちいい国だと感じた!

8月10日(月) ポニョ

午前中は A チーム・B チームが分かれて、別々の学校へ行きました。B チームはシヨモシンスクールへ。授業を見学した後、お互いに歌を歌いました。それから外へ出て、「なべなべ そこぬけ」と「ハンカチ落とし」をしました。「なべなべ」は日本語で歌ったのに子どもたちはまねて一緒に歌ってくれました。「ハンカチ落とし」は少しルールが違いましたが、この遊びを知っているようでした。



午後はヒンドゥー教徒が暮らす村へ行きました。まずは礼拝を見学。しだいに誘われ、みんなで楽器の音色に合わせて踊りました。その後、2軒のお宅を訪問させていただきました。子どもたちは持てないくらいたくさんのお花を私たちにプレゼントしてくれました。

~~ ルティの作り方 ~~

ツアーの朝食といえば、ルティに卵、ルティにバナナ、ルティに…。

とにかく！ルティがないと始まらない！そんなルティの作り方を大公開！

〈作り方〉ルティ4枚程度

1. 水 150cc くらいを沸騰させ、塩を適量加えよう。
2. 小麦粉（薄力粉でも○）をヘラで混ぜながらドバドバ〜っと加えよう。
小麦粉が固まってヘラが動かなくなるくらい。ダマはここでは気にしないっ♪
3. 火を止めてそのまま1時間放置。ちょっと休憩？
4. ゴルフボールよりちょっと大きい位ずつ取って、小麦粉をまぶしながらダマがなくなるとなめらかになるまで良くこねる。こねる！こねる！！
5. 熱さ 2mm 位に丸くのぼして〜…
6. 強火にかけたフライパンで、油をしかずに、片面 25 秒ずつ、ひるまぜに焼く！
焦げ目を確認して、完成〜！簡単でしょ？

Aチーム

8月11日(火) たかえさん

今日は、A チーム(ジャマルプール)・B チーム(ネトロコナ)に到着し



て2日目が経ちました。私達 A チームは、ジャマルプールの町をしました。村の子ども達と手を繋ぎ、「かえるのうた」やちも子ども達もみんな笑顔で挨拶を交わしてくれました。「大きな栗の木下で」を歌いながら歩きました。そして、牛やにわとり・犬ややぎなどの動物、壮大な自然と心地よいそよ風を感じながら歩きました。まるでジブリの世界ですね！村の人たちも子ども達もみんな笑顔で挨拶を交わしてくれました。

Bチーム

8月11日(火) ニッシー

今日からいよいよ 1 週間、農村へ！Bチームはネトロコナへ向かいました。4 時間 15 分の車の旅を、歌いながら、寝ながら、楽しんでいるうちに、ネトロコナに到着し♪私達がみんな最初に感激したのは、このネ



トロコナの自然の美しさでした。緑豊かで、空が広く、ゆったりと時間が流れているような場所で、散歩していて本当に気持ちよかったあ☆そして早速、たくさんの子供たちが、BDPオフィスに遊びに来てくれました♪みんなの目の輝きと笑顔がホントに印象的です。夕食のヘモントさんとオシムさんの釣った魚もとってもおいしくて、満天の星も見えて、本当に素敵な 1 日でした！

Aチーム

8月16日(日) ゆき

今朝の朝食はトーストが出ておどろき！またたくさん食べてしまった。昨夜の雨天で、急きょ異なるBDPスクールへ行った。いつもの様に盛大にもてなされるのではなく、自然な授業が見られて新鮮だった。また、2つ目の学校では円になってソーラン節を踊った。午後、男はベンガルカットをしに街へ。女はサリーの着付け。女の先生方がピアスやネックレスまで選んでくれて、ベンガル風の化粧やメンディまでしてくださった。そして夜はお別れ会。テンション高くて踊りまくり。バシェッドさん熱唱。ここで過ごした1週間は驚きの連続で楽しくてとても深いものだったから、淋しくて別れるのはつらい。けれど、最後までそれを感じさせない明るさだった。ジャマルのみんなドンノバット！



Bチーム

8月16日(日) のん

今日は最後の学校訪問(;)今日はリキシャで学校へ行きました！が、しかしリキシャで行けるのは途中まで…。途中から田んぼのあぜ道を歩いて学校に行きました。自然が気持ちよかったです。子どもたちが私たちを迎えにきてくれました☆今日だけじゃないけど、たくさん子どもたちと一緒に同じ時間を過ごせることって本当に楽しかったし、幸せですね。歌って、踊って、遊んで…。キラキラした笑顔の子どもたちに、ネトロコナチーム一同、また今日もたくさんの元気をもらいました！帰りは雨が(;)だけどしばらくしたら止んで、午後は宿舎に来てくれた子どもたちと遊びました！『アルプス一万尺』知らない間に皆できるようになっていて、びっくり！

Aチーム

8月17日(月) わっさん

遂にジャマルを出発!!!大好きなジャマルのスタッフと別れ、とても寂しくなりました。モクレスさん、バシエットさん、ホビさん、モタレフさん、we miss you!!!そして、ドンノバット☆☆☆



プーバイルへと帰る道筋の途中で、かとちんの貴重品が車から盗まれました。幸いパスポートは盗まれませんでした。自分たちの所持品管理の甘さを改めて反省しました。

ひたすら爆睡し続けた長いドライブの後、プーバイルに到着し、Bチームのメンバーと再会♪しばらくぶりに帰ってきたプーバイルではカルチャーショーの準備が進んでいました。ショーのプレッシャーを直に感じつつ、Aチームのみんなと楽しいソーラン節の練習。練習の成果は、明日のショーに乞うご期待。そんなこんなで楽しく一日を終えました。

Bチーム

8月17日(月) えり

ネトロコナを出発して、プーバイルに戻る日です。最後の朝食のときにハビブさんがネトロコナに来てくれてありがとう



と言ってくれました。おいしい食事を出せなくてごめん。とも言っていたけど、食事はとてもおいしかったし、ヤシンさん、アナロルさんをはじめとしたネトロコナのみなさんは、いつも私たちが気づかせてくださったし、楽しませてくれました。

最後にみんなで写真を撮り、涙のお別れをしました。ハビブさんの悲しそうな顔と私たちの車を追いかけてきてくれた子供たちが印象的でした。そしてプーバイルに戻り1週間ぶりに A チームと合流。あとはそれぞれのんびりとした時間を過ごしました。



8月18日(火) たかちゃん

午前中は、ミレールバザールへお土産を買いに行きました。皆はアクセサリー、ポストカード、塩・ティー様々なものを買いました。

午後は、カルチャーショーをしました！A チームはソーラン節と春一

番、B チームはマンゴー太郎とキセキの合唱、それぞれとてもいい作品になったと思います。練習の成果が見られ、BDBのスタッフさんやお客さんたちにも大変好評でした。現地の人たちのダンスや、歌・楽器の演奏など心温まるものもありましたが、何だか踊りだしたくなるような音楽もありました。

8月19日(水) ニッシー

今日はついにバングラデシュ滞在の最終日。シェアリングも今日が最後。それぞれが感じた、考えたバングラデシュでの二週間の思いをBDPスタッフも一緒に語りました。思わず、みんな涙が込み上げてくる。この2週間の出来事を通して自分達自身を見つめなおしていたのかもしれない。そしてまた新たな課題をそれぞれが見出していたように思う。



夜、ギターに合わせながら別れを惜しむように、バングラソングと日本の歌を何度も何度も歌った。本当にBDPのスタッフの方々に、そしてまたこのスタディツアーに関わった全ての方には感謝しきれない気持ちでいっぱいです。心からドンノバッド。そしてアバルデカホベ。

8月20日(木)

のりこさん

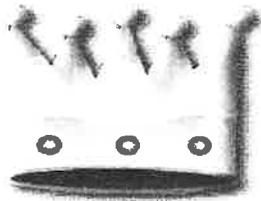
BDP のスタッフと別れダッカ・ジア空港の中に入ると、急に淋しくなりました。あっという間に 2 週間が過ぎてしまったのです。荷物を預けチェックインをし、出国カウンターを通り、だだっ広い待合所のベンチでは、早速、報告書編集員が集まり、編集作業の日程などが相談されました。真夜中ということもあり、人の数は少なく、お店の数も少ないので、ぐるっと一回りすれば、もう見るところはなくなってしまいます。搭乗手続きが始まり、搭乗口に移動しましたが、今回はとてもスムーズで、荷物の中味を調べられることはありませんでした。予定通りダッカ空港を飛び立ち、香港では 1 時間半ほどの短い時間で乗り継ぐことができ、無事に成田空港に到着いたしました。預けた荷物も全部受け取り、感謝の祈りをして、到着ロビーに出ました。出迎えてくださった、カトチンのお母様に全員記念写真のシャッター押しを頼みました。絶妙なシャッターチャンスで、みな顔を一気にほころばせたのは、さすがカトチンのお母様、と納得。ありがとうございました。

感謝、感謝のスタディーツアーでしたね。みなさんアパールデカホベ！

中川さん

ダッカのジア空港で搭乗のための諸手続きを済ませ、ロビーのベンチに座っているうちに、日が変わって 20 日になった。今日の午後には成田に帰着するのだと思うと妙な気がする。ああ、もう二週間が過ぎてしまったのだ、もう日本に帰ってしまうのだと思うと、とても寂しい。バングラデシュに到着した最初の晩は、BDP トレーニングセンターのそばにある養鶏場の鶏たちの声がうるさくてたまらなかった、よく眠れなかったと、みんな口をそろえて訴えた。しかし、翌晩には鶏の声など気にせずみんな眠ることができた。鶏が静かになったわけではない。こちらが馴れたのだ。人間の適応力とはすごいものであるとつくづく思う。

2 週間で過ごしたバングラデシュの日常が、すでに、参加者ひとりひとりにとっての日常になっている。これから日本の日常に戻っていく。うまく戻れるだろうか。香港での乗り継ぎも成田での到着手続きもスムーズに運び、一緒に祈ってから解散。ひとりひとりそれぞれの日常に戻っていく。日本の日常にたぶん多少の違和感を覚えながら。一晚眠ればその日常にもみんなまた適応できるのだろうか。それとも、バングラデシュから帰国後のみんなの日常は、バングラデシュに行く前の日常とは変わったものになっていくのだろうか。



みんなのバン格拉ランキング

👑 子供と盛り上がった遊び 👑

1位 アブラハム

ハンガリもジャバニも大人も子供もみんなで歌って踊りましょ

2位 ボロボロバーハレ (アルプス一万尺)

手遊びに苦戦しながら、一所懸命覚えてくれた子供たち

3位 長縄・なべなべ底抜け

天気の良い日に外で遊ぶならこの二つ！

4位 おりがみ

鶴、船、猫、犬などに子供たち大興奮、でも、とり合い注意！

👑 お気に入りの歌 👑

1位 ドヤル・ババ

この歌があればいつでもどこでも大盛り上がり！

2位 エイ・ポッター

独立記念の歌。子供たちも大好き

3位 アミ バングラ ガン ガイ

バングラを愛する人必須の歌

4位 アミ ダウデル モト ガン ガイ

テンポの良さと、繰り返の多さでみんながノリノリになれる歌

👑 おいしかったもの 👑

1位 マンゴー

堂々の第1位! 『一生分のマンゴーを食べた』と大満足

2位 カレー

野菜、魚、ビーフと人によって好みはあれど、みんな大好き

3位 チャー

食後にシェアリング時にと常にほっと一息させてくれた一杯

4位 なすの天ぷら

日本人にもなじみのある絶品

👑 よく使ったベンガル語 👑

1位 ドンノバット (ありがとう)

感謝しっぱなしの ST の頻出ワード

2位 オシュビダナイ (問題ない)

バングラではみな遅しく、小さな問題はオシュビダナイ

3位 モジャ (おいしい)

食事中はいつも『モジャ』の大合唱

4位 ケモナチェン (元気?)

この言葉から、相手とのコミュニケーションをスタート

😊 あると便利なもの 😊

人によって様々なグッズがあがったので列挙します

懐中電灯	洗濯ばさみ	帽子	ルンギ	日本の写真
ペットボトル	S字フック	ギター	ガムチャ	けん玉
つめきり	ボカリの粉	歌集	勇気	アイスクール
ハンガー	日焼け止め	辞書	体力	デオドラント

ACEFスタディツアー一行がプーパイルに到着した翌朝、8月7日に、BDPスタッフと再会を喜び、おしゃべりをしていると、ロチョンさんがこんなことを言った。

「明後日、8月9日は、ぼくにとって、とても大切な日なんだ。」

ロチョンさんは、2009年1月からBDPの仲間に加わった新しいスタッフで、プーパイルにあるBDP職業訓練校の機械科の先生として、オートバイや自動車の修理技術を教えている。余談だけれど、ロチョンさんの前任者ショミルさんは、BDPを辞めてから、自動車部品を扱う小さな店をプーパイルの目抜き通り沿いに出した。ほぼ同時に結婚もした彼は、いつかは自分の自動車修理工場を持つのが夢だという。経済発展が加速しつつあるバングラデシュ。地道に働こうとしているショミルさんにとって、決して手の届かない夢ではないように思える。数年後には、映画「三丁目の夕日」に出てくるような自動車修理工場の親父さんになっているのかもしれない。

1994年12月23日の国連決議(49/214)で、毎年8月9日を International Day of the World's Indigenous People とすることが定められた。国際的に世界の先住民族のことを憶える日ということだ。ロチョンさんは、バングラデシュの先住民族のひとつであるガロ族の出身で、日本にもよくいそうな感じの風貌をしている。ガロ族は、日本人と同じモンゴロイド系の民族で、チベット・ビルマ語系のマンディ語を母国語とする人びとだそう。歴史的には迫害を受けたこともあるらしい。アジアの各国において先住民族や山岳民族にはキリスト教徒が多いけれど、国民の大多数がイスラム教徒であるバングラデシュでも、ガロ族の90%以上はキリスト教徒だ。

日本では、8月9日のInternational Day of the World's Indigenous People は全く重要視されていないようだ。バングラデシュに出かけるといつも色々なことに気付かされる。今年は、先住民族のこと、少数者の人権を守ることなど、日本の社会の抱える問題を考えさせられる契機を与えられた。



ダッカで見かけた International Day of the World's Indigenous People のポスター(上野峻一さん撮影)

国際交流

バングラデシュでの2週間の生活は日本との違いを肌で感じながら物乞いをする子供たちと出会った時何もできない自分に豊かさとは貧しさとは何なのかと問いただしても答えは出てきません。シェアリングの時空港で寝ていた2人の子供、物乞いをする子供をみた時目をそむけてしまった。怖かった。又高い目線で見ている自分を反省した。いろいろな声が聞かれました。今まで知らなかった国にきて多くの人と出会い喜び、悲しみ、笑い、涙し、新しい発見に驚きともに共有したことは国際交流の始まりなのではないでしょうか？評議委員の山口恂さんがいつも国際交流とは相手国に心配する友人を作ることだと。

今まで気にもしなかったバングラデシュが洪水だ、サイクロンだとニュースを聞くと今まで感じなかった事が心配になってくるあの人はあの子供たちはどうして居るだろうと思いをはせます。4年前にジャマルプールに行った時に旬さんが3mもする大きな鯉のぼりを

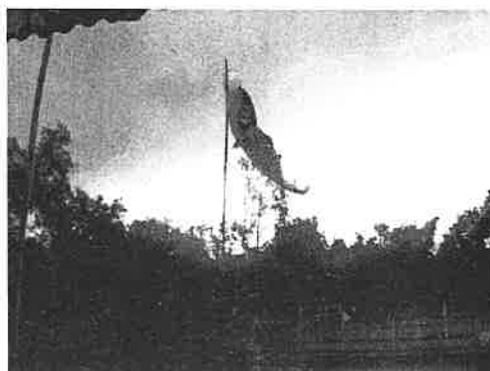
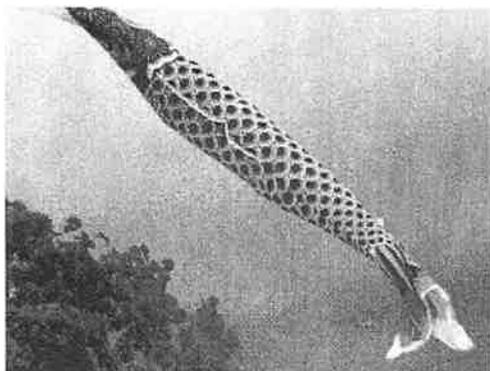
プレゼントしました。青空に大きな鯉のぼりが泳いでいるのを初めて見た子供たちはびっくりし大きな声を揚げ大喜びでした。それを思い出す光景が今回ジャマルプールの新しい学校の落成式で今にも雨が降り出しそうな空に高く鯉のぼりを掲げ私たちを迎えてくれました。

日本とバングラデシュ遠く離れていますが ACEF と BDP 4年前訪ねたメンバーを忘れずまた新しいメンバーを鯉のぼりを掲げ迎えてくれた。その鯉のぼりを見たとき私は大声を上げ、鯉のぼり、鯉のぼりと目頭が熱くなりました。ジャマルプールスタッフとの心と心のつながりそこに流れる暖かな愛を感じずにはいられません。国際交流とは小さな出会いから友情が芽生え互いに思いやり共存していく事なのかも。

また新しい仲間ができました。新しい経験もしました。楽しい2週間でした。皆さんに感謝します。

ドンノバット ドンノバット ドンノバット

高崎和子



God bless you!

青山学院大学4年 上野 峻一

バングラデシュでこの言葉を初めて使ったのは、ダッカの空港で物乞いをしていた男の子達と別れる時だった。前回の春のスタディツアーでは、僕がほとんど関わることがなかった子ども達。もちろん、どうして良いかわからないということもあったが、無視をして関わらないことで、自分の現実に関係のない存在としようとしていたと思う…。

しかし、今回なぜか自然と体が動いた。日本で話しかけても人見知りする3歳の子どもを、何とかして笑わせようとするみたいに、二人の幼い物乞いをしていた男の子と話して、手品をして、冷たい表情から小さな笑顔を見ることができた。そして、別れ際、その子の肩をさすって何度も出た言葉が「God bless you!」であった。

このような場合、あげる、あげないは、よく問題になる事柄である。このことは一人ひとりよく考えて、答えを出していくことなのだと思う。けれども、この時、僕には無視することができなかった。それは自己満足な祈りの言葉ではなく、関わるからこそ、その子の笑顔と目を思い出して、心がグツとなる…そんな無力な人間の言葉であった。

最後にこの言葉を使ったのもダッカの空港だった。それはアルバートと別れる最後の言葉。よく考えると、春の時も、5月に彼が来日した時も、いつも彼と別れる時は、お互い痛いぐらいの握手と、この「God bless you!」を交わし合う。僕はこの言葉を通して、バングラデシュの子ども達が本当に救われることを願い、BDPの活動が神によって導かれ祝福されることを祈っている。

どれだけ思いっきり子ども達と遊んでも、また関わるすべての人と笑顔でつながっても、やはり日本人の僕に具体的できることは限られている。

でも、だからこそBDPという信仰の友のために祈り、その活動を日本で支えることに意味があるのだろう。今回のスタディツアーで友に再会し、

Friendshipを深めたことは、春に続き参加したからこそ、確認できた大切なことであった。中途半端なヒューマニズムではなく、信仰の友と互いに祈りつつ、支え合う活動がACEFとBDPの「共働」の関係であると改めて感じる事ができた。

いつか将来、ディコと交換したベンガル語の聖書を持って、今よりもパワーアップして、またバングラデシュにいる信仰の友に会いに行きたいと強く願う。God bless them!



子供の顔を見ると首をかしげる自分の姿に気づいたのは、日本に帰ってきて3週間が過ぎたある日でありました。首をかしげるのはバングラの会釈のようなもの。それが日本に帰ってきても抜けられないほど、バングラではたくさんの子供たちと挨拶を交わし、笑顔を交わしたのだと、首をかしげるたびに思い返しています。

バングラの子供たちは、日本人に比べると目が大きく、顔は本当に表情が豊かでした。その目は言葉を理解できない私にも、きちんと意思を伝える力がありました。楽しい！ ありがとう。また明日、などなど。時には、お金をください、そんな要求を、手と目を使って訴えてくる子供にも、出会いました。

スタディーツアーの中で、新しい校舎の開校に立ち会う機会がありました。テープカットをし、村の人々を多く招いて盛大に行われた開校式は、7年もの長期にわたり村の人が願いをこめ、教育に夢を託した学校の、新しいスタートでありました。

「最貧国」の一つに数えられる国の中で、多くの出会いを与えていただきました。先にも書いたとおり、物乞いの少年にも出会いましたし、村の教育に望みを託した村の人々にも出会いました。その出会いの中で、強く感じたのは、人々の明日へこめる願いと、その必死な姿でした。それはあまりにも平和で、当然のように生活を謳歌できる日本では、到底感じる事ができないものであったように思います。その姿に対して、「かわいそう」という同情めいた言葉を、私はかけたいとは思いませんでした。その言葉は、非常に上から、相手のことを知ろうともしない人が使う、とても寂しい言葉なのかもしれません。

私は今回のバングラのことをもっと知りたいと思えるようになりました。そしてたくさんのもので与えてくれたこの国に、なにかお返しができないかと考えるようになりました。そう思ったとき、私の中でバングラはかわいそうな国ではなくなりました。

不安が多い生活から、少しでも不安を取り除こうとしている人がいます。笑顔あふれる温かい国を、さらによい国にしたいと思っている人がいます。そのお手伝いをしたい、きっと、こんな私にも、なにかできることがある、と今回のツアーは思わせてくれました。大きくなくても、ちっぽけなことでも、願いをこめて、必死にやればいいのか、そんな勇気を、バングラデシュの人たちは与えてくれました。始まったばかりの私とバングラの間を、これからの生活の中でよいものにし、私なりに、バングラと共に生きる道を探していこうと思います。

支えてくださった多くの方々、メンバー一人ひとりへの感謝と共に。2009年9月。

「豊かさ」って何だろう。日本のように高層ビルが並び、物や情報に溢れることだ

ろうか。「貧しさ」って何だろう。最貧国といわれるバングラデシュのように物や情報に乏しく、電気や水が充足されていないことだろうか。バングラデシュには物乞いの子供・おばあさん・おじいさん、教育を受けることが出来ない子供たちがいるのは確かだ。しかし、彼らがどういう気持ちであるのかは実際知ることは出来ない。そして、私自身彼らに何もすることが出来ないし、声を掛けることさえも出来ない。どうすることも出来ないのが現状なのだ。では、物乞いの人たちがいるから「貧しい」と言われるのだろうか。ST から1週間経った今、「豊かさ」と「貧しさ」というテーマ・物乞いの問題については解決出来ていない。ましてやこのテーマは1ヶ月、1年、10年経っても解決出来ないものかもしれない。私は、このことを永遠の課題として受け止めていかなければならないと感じている。

私はバングラデシュでの2週間を振り返る時、何よりもまず人々の「温かさ」を身に沁みて感じる。人々と挨拶を交わした瞬間、BDP スタッフさんの笑顔、子供たちの

笑顔、通り過ぎる人々の笑顔。日常生活に「挨拶」と「笑顔」は弛まず、人々の目はいつもきらきらと輝いている。物や情報には溢れていないけれども、人々はその環境に適応出来ていきいきと生活している。また、電気もなく密集した環境でさえも勉学に熱心に励む子供たちの姿勢からは、子供たちの強い「意志」を感じた。やらなければいけないといった「義務」的ではなく、全ての子供たちは勉強をやりたいといった「意志」を持っている。だから、あのような素晴らしい笑顔でいつも目が輝いていられるのだろう。私は、子供たちから弛まぬ笑顔と前向きな姿勢、積極的な志を学んだ。そして、言葉や文化・宗教も違うからこそ「コミュニケーション」という伝え合うことの大切さを学んだ。

バングラデシュでは、今まで経験してきたもの以上にたくさんのものを見て、聞いて、感じて、触れて、経験することが出来た。大きな課題は残っているが、ここで経験してきたことは今後の生活の糧にもなり、素晴らしい「こと」として私の心の中に存在することだろう。

STに関係する全ての人々に心から感謝したい。本当にありがとうございました。

ドンノバット!!!

高橋和可乃

みなさま、ノモシカールです。バングラでは、華の女子大生であるにも関わらず、最初から最後までおっさんキャラで通した私です。あのすばらしいバングラスタ ディツアーから、約二週間以上が経とうとしています。現在の私は、バングラで食べた美味しいカレーのことで頭がいっぱいです。いや、そうではなくバングラ デシュがとても恋しいです。日本に帰ってからといもの、私は極度のバングラシックに陥ってます。

実は、スタディツアーに行く前、私はバングラでは経済的な貧しさによる悲惨な状況を目にし、辛い思いをして悲しみを抱えながら日本に帰るのだらうと考えていました。しかし、実際は私の想像とは全く異なるものでした。BDPのスタッフの方々との楽しいコミュニケーション、BDPスクールの子供たちや現地の村人との交流を通して、とてもステキな思い出がいっぱい出来ました。今、スタディツアーを振り替えると楽しかったことしか思い浮かばないくらいです!!!

確かによく考えると、日本では経験できないような、胸が痛くなる出来事に直面したこともありました。特に、物乞いや貧しい人々のことを自分がどう考え、接していくべきであるのかということは、私にとって大きな問題でした。その問題については今でもわかりません。しかし、物乞いや貧しい人々に出会い、私の彼らに対するイメージがマイナスからプラスへと変わりました。私が身をもって実感し心から理解できたことは、彼らは私たちと同じ人間であり、物質的な貧しさは必ずしも精神的、心の貧しさとはイコールにはならないことです。彼らと接していると心が温まるようなことが多かったのですが、その反面、以前から私の中で抱えていた問題についてよく考えるようになりました。そんな時、毎晩行われるシェアリングによって、他のメンバーの意見を聞き、わからないながらも異なった視点でさまざまなことを考えました。そのことによって、私が日本に帰国してからも考える必要のある課題について整理でき、また、自分自身成長できたような気がします。そんな経験も含めて、バングラでの経験はすべて有意義でステキなものでした。

とにかくバングラでの2週間はとても充実した実りの多い期間でした。この経験を絶対に忘れないで、大切にしていきたいです。そして、これからもACEFを通してバングラと繋がっていきたいと思います。

最後に、バングラ、ツアーのメンバー、BDPスタッフ、出会った人々、日本で支えて下さった方々、ドンノバット!!!そして、みんな大好きだ~~☆☆☆
★それでは、みなさまアバルデカホベ~♪

ドンノバット！！！！

中島 悠貴

日本に戻り、静かな毎日に何か物足りないものを感じる日々をおくっています。私にとってバングラデシュで過ごしたあの2週間は、本当に夢の世界にいるようでした。

成田空港へ向かう直前は、1時間に何回もトイレを催すほどの緊張に見舞われていました。楽しみがあったのですが、どこかで不安があったのです。というのも、日本にいて“バングラデシュ”と聞くと多くの人は“よくわからない貧困の国”としかイメージがなく、私もその中の一人でした。

しかし今、“バングラデシュとは？”と聞かれたら「人々が温かくてにぎやかな国！」と即答します。鶏、牛や蛙の鳴き声、モスクの音などが毎日聞こえ、混沌とした街ではリキシャや自動車のクラクションの音や人々の話し声が聞こえます。そして、すれ違う人に首をかしげて挨拶すると笑顔が返ってきます。よく子供たちは近くに生えている小さな花や葉を持ってきて、私にくれようとしてきました。それらは、おそらく日本で雑草と呼ばれ、抜かれるか踏まれてしまうかというものだと思います。私が手いっぱいになってしまって、何枚か地面に落としてしまうと、ほかの子供たちが一枚一枚拾って渡してくれました。それを見て、小さな花や葉一枚でも大切に作る精神を感じたように思います。私も一枚たりとも落とさず、その気持ちを受け取り、感謝をしました。

バングラデシュで、物乞いをする人や空港で寝ている子供たちを確かに見ました。一国として物質的に足りないものが多くあるのかもしれませんが、ですがそれ以上に、はるかに日本とは違う“豊かさ、温かさ”が十分あるように感じました。

効率性や利益ばかりを追い求めてしまいがちの日本人にバングラデシュの“豊かさ”を感じてほしいです。心からあふれでる温かさ、人々の懸命に生きる姿、私はたくさんたくさん賜物をいただき、日本に戻りました。バングラデシュ、ACEFメンバー、BDPスタッフ、子供たち、料理をつくってくれた方々、出会った人すべて…ドンノバット！！！！
これからが私のスタートだと思っています。

とーってもとーってもクシクシ。

東京女子大学 1年 守屋美左子

帰国してからもどこかバングラタイムがぬけず、東京のせかせかした生活に戸惑いを隠せないでいます。たくさん笑って、考えて、感じて、時には涙して、とても充実したバングラでの2週間を恋しく思います。

バングラデシュでは停電は頻繁にあり、道路はがたがた、物乞いの人や道で寝ている子供がいて、物質的に不足している面はたくさんあります。しかし、その一方で自然が豊富で、ハートフルな人がたくさんいて、愛らしい子供の笑顔がたくさんあって…お金には返られない豊かさに溢れています。2週間たくさんの辛い場面を見るだろうと覚悟をしてバングラに向かいましたが、BDP スタッフの配慮もあり、私自身が想像していた「貧困」というものをじかに感じることはあまりありませんでした。本当に貧しい人たちの生活を経験したわけではないからそう思うのかもしれないかもしれませんが、バングラデシュをアジアの最貧国というのはどうなのかなと感じています。

BDP スクールを訪問したり、近所の子供たちと遊んだりするなかで、心の通じ合いは言葉の壁をも超える！そう思った瞬間がいくつかありました。が、やはり、感じていることや考えていること、伝えたいと思うときにうまく伝えられないもどかしさを覚えたこともありました。その時にあらためて言葉の持つ力を認識しました。まずは英語の力をつけることが今後の私の第一の課題です。

たくさんの笑顔に出会い、たくさんの人と出会い、そしてこれからもつながってほしいと思える友達もできました。ちなみにたくさんのベンガル語の先生もできました。

ベンガル語、英語、日本語の3ヶ国語が混ざり合った日常がなんだかやけに心地よかったです。これからもなんらかの形でバングラデシュとつながっていけたらと思います。

私がスタディーツアーに応募したのは、途上国と呼ばれる国の現状を、身をもって知るためでした。実際に行き目で見て初めて感じられることがたくさんあるだろう。そんな期待をもって旅立ちました。そして、期待は叶いました。バングラで過ごした二週間、実際に自分の目で見たからこそ知ることを感じる事が沢山ありました。

まず、今まで漠然としかイメージできなかつたことが少し具体的になりました。ツアー前は、バンラデシュ=途上国というひとくくりでしか考えることができませんでした。今は、2週間で出会った人、見た人たちの顔が浮かびます。当たり前だけどバンラにはたくさんの方がいてそれぞれがそれぞれの毎日を生きている。今更ながらそのことを実感しました。ツアー前は、物乞いの人にお金をあげても物乞いという行為はなくなるのだから何の問題解決にもならないと思っていました。しかし、実際物乞いをする人に出会い、その人のその日の暮らしは物乞いでお金を得ることでしか成り立たないのだと気がきました。結局お金はあげなかったし、それがいいのか悪いのかまだ答えは見つかっていませんが、これからも考え続けようと思います。

中でも一番心に残っているのは初めてBDPスクールを訪ねた時のことです。教室に入った瞬間に子供たちが総立ちで、笑顔で、日本語でこんにちはと言ってくれました。ああ、来てよかったと思いました。とても胸が一杯になって授業を見学させてもらっている間ずっと涙をこらえていました。何度もいろんな人にこの感じを伝えようと試みましたがどうやら言葉で表すのは不可能です。なぜなら、これは実際に行き初めて感じることでできたものだからなのだと思います。

いろいろなことを考えたツアーでしたが、楽しいこと、心温まることのほうが多く、バンラデシュが大好きになりました。日々様々なことを教えてくださり、そして常に気遣ってくださったBDPのスタッフの皆さん、歓迎してくださったBDPスクールの先生や子供たち、毎日遊びにきた子供たちのおかげです。恋しいです。彼らに再開しに、また行きたいです。その時は、二週間では知ることのできなかつたこの国のいろんな面を知りたいです。良いところも悪いところも。また、ツアーでは自分の将来のことも含めて物事を真剣にじっくりと考える機会を与えられました。特にシェアリングはメンバーの意見が聞けて、自分の考えも整理できるよい時間でした。ツアー中考えたことを今も考え続けています。このツアーでなければバンラデシュに対して全く違つた印象を持つただろうし、ここまで考えられなかつただろうと思います。もっと知りたいと思う前にこの国を嫌いになっていたかもしれません。このツアーに参加できたこと、ツアーで出会つたすべての人に心から感謝しています。オネック ドンノバット！

さまざまなことを知ったり感じたり考えた私はこれからどうするのか、という課題に真摯に取り組んでいこうと思います。これからもバンラデシュを想い続け、バンラデシュと関わっていきます。

なぜ学校に行けないの？

井上儀子

ネトロコナ地区にBDPの寺子屋小学校が始まったのは2002年1月です。この地区には今まで政府の学校もなかったので、一度も学校に行ったことのない子どもたちがBDP小学校に通えるようになることは本当に嬉しいことでした。

翌年私は一人の小さな男の子に出会いました。いつも赤ちゃんの弟を抱っこしていて、小さな妹の面倒も見つつ、さらにお母さんのお手伝いもしていました。次の年に出会った時、この男の子ノヨンくんは妹と一緒にBDP小学校の一年生でした。お姉さんが二人いるのですが、家族の中で今まで学校に行った人は一人もなく、ノヨンくんは妹のルジナちゃんは初めて学校に行かせてもらったのでした。学校はとても楽しいと二人とも大喜びで、ノヨンくんは先生のお話を一つ残らずすぐに覚えてしまい、賢い少年でした。でも小さいながらも早くお金を稼いで両親を助けなければいけないことは、すでに感じていて、私と手をつないで歩きながら、「ボクなんでもお仕事を手伝うから日本に連れて行って！」と何度も私の腕にぶら下がりながら懇願していました。ところが2年後に訪れた時、ノヨンくんはもう学校には行くなと両親に言われ、友だちが学校に通うのを横目に見ながら、近くのお茶屋さんでカップを洗う仕事を手伝っていました。小学校3年生で、もうドロップアウトです。私はお母さんと話をし、お父さんとも話をしましたが、貧しさゆえに働かなくてはと言われたら、返す言葉はありません。村の中でも貧しい家庭でしたが、突然の竜巻で家は飛ばされてしまい、何も無くなってしまい、近くの池のそばにお父さんは一人で泥を積み重ねて簡単な小さな家を建てました。本当に極貧の生活を強いられている人の前で、教育の大切さを話しても何とむなしく響くのでしょうか。しかしお父さんは私たちがBDP小学校を訪問する日、ノヨンくんが仕事を休んで学校に行ってもいいと許可してくれました。でも、ノヨンくんは教室の中には入れず、学校の横の道にぼつんと立って、私たちをずっと見ていました。ネトロコナでの別れの日、ノヨンくんはお父さんのように、リキシャ引きになるのだと話してくれました。

そして今回の出会いは…。小さいながらもリキシャ引きとしてがんばっている姿を私は楽しみにしていました。なぜなら、プーパイルでもジャマルプールでもBDP小学校に通う男の子がリキシャ引きとして働いている少年を見ているからです。ところが、ノヨンくんは何も仕事をしていませんでした。一日中家にいるとのこと。もちろん家ではたくさんのお仕事はあるでしょう。牛の世話をしたり、草を刈り取って集めたり、薪を集めたり、…でもお金を得ることはできません。だったらBDP小学校に通うのをやめなくても、午前中だけ、午後だけ学校に通うことぐらいできたであろうにと、合点がいきません。一緒に一年生で勉強していた妹のルジナちゃんは5年生になっていました。お兄ちゃんはとても頭がいいのよ、と話してくれました。リキシャ引きになりたいけれど、背が低くて力が足りないのよ、とても無理なのだそうです。ルジナちゃんも勉強が好きで、高校にも大学にも行きたいけれど、とてもそんなことは両親には言えず、小学校5年生を終えたら、二人の姉と同じようによその家のお手伝いさんになるのだらうと、悲しそうな表情でした。

貧しさゆえに学校に行けない子どもたちでも、学校に通うことができるように、ノンフォーマル(働きながら通える)のBDP寺子屋小学校があるのに、なぜそのBDP小学校にも通えないほどの貧しさがまだ残っているのでしょうか？

私の頭はまだ悶々としていて、心が痛みます。

心からドンノバット

横須賀学院小学校教諭 山下 真実

バングラデシュに行く以前、私はバングラデシュという国に対して、「貧しい国」という漠然としたイメージを持っていた。それは、食べるものに困っていると、生活に困っていると、そういう具体的なイメージではなく、本当にただ漠然としていた。色々想像するよりも、行って実際にひとつひとつのを見てこよと思っていた。また、スタディーツアーということで、バングラデシュに行かせていただくことになってから、自分には一体何ができるのかとずっと考えていた。たった2週間で、小さな自分一人が、その「貧しい国」に行ったとして、一体何をすることができるのだろう。何もできずに帰ってくるのではないだろうかと思っていた。

しかし、行ってみるとそこは、どこまでも潤いに満ちた緑の自然が広がる、自然豊かな国だった。果物をはじめ、食べ物もとてもおいしかった。またそこに住む人々の笑顔は、「人ってこんなにきれいに笑えるんだ」と思うくらいにきれいな笑顔だった。ずっと、漠然と「貧しい国」と思っていたバングラデシュが、とても「豊かな国」に見えた。

日本にいと、自然が見たくなって旅行に行ったりする。身近に花が欲しくて、玄関先にプランターで花を植えたりする。でも、バングラデシュには、すぐ身近に広大な緑が広がっている。日本にいと、今日の昼ご飯は何を食べようかと迷う。旅行に行く先々で、何か美味しい食べものはないかと、珍味を探して歩き回る。でも、バングラデシュでは、毎日ご飯とカレーと果物を食べる。「モジャ、モジャ（おいしい、おいしい）」と言って食べる。本当においしい。日本にいと、楽しい時間を過ごすためにお金を払う。娯楽施設に入るには高額のお金が必要だし、ゲームセンターなんてたった数分のために100円玉を何枚も使ってみんな遊んでいる。でも、バングラデシュでは歌を歌う。魚を釣る。自然の中で、何も無くても楽しく過ごせる。そこにいと、気づいたら歌を口ずさんでいる。

一体どちらが「豊かな国」で、どちらが「貧しい国」なのだろう。バングラデシュの人々を見ていと、彼らは自分たちに与えられている最低限に近いもので、精一杯生きることを知っているように感じる。日本のように物に溢れてはいないけれど、みんな素敵な笑顔で笑うことのできる豊かな心を持っている。子どもも大人も、みんな精一杯、生き生きと生きている。日本はどうだろうか。物に溢れた社会にポンと生まれ出てきて、生きていく上では必要以上に多過ぎる選択肢の中から、好きなものを選ぶことができる環境で育った私たちは、生きていく上で本当に必要なものが何かを知らない。必要最低限ということを知らない。だからこそ、ひとつひとつのありがたみが分からない。人は誰しも、本当は必要最低限の中で生きることを経験しなければいけないのだと思う。日々与えられる「日ごとの糧」を、心から感謝できるようになるために。今のこの瞬間、目の前にある物、目の前にある人が、どれだけ大切かを知ることができるようになるために。

スタディーツアー。私はバングラデシュで出会った人々に何をすることができただろう。ただ受けるばかりで、教えられるばかりで、学ぶばかりで、この旅は本当に私にとってのスタディーツアーだった。私は、そんなバングラデシュに何をしてお返しができるだろうか。まずは感謝しよう。心からドンノバット（ありがとう）。

バングラデシュに写ったもの

井上 京子(きよーちゃん)

最後の日に、アルバートさんが話してくれた言葉がとても印象に残っている。

『バングラデシュと日本はミラーの関係にある』。彼は、私たちがバングラデシュを知ることによって自分自身を知ることになると続けた。スタディーツアーを終えて、まさにその通りだったと思っている。たくさんの違いをもつはずのバングラデシュがどうして私たちのミラーとなったのか。バングラデシュに来るにあたっての不安は二つあった。一つ目は手でご飯を食べること。そして二つ目はバングラ式トイレ。食事とトイレの方法が大きく異なる国が、私たちのミラーになるなんて想像もしていなかった。

バングラデシュには人間が大切にすべきことがしっかり残っていると感じた。私たちがあまりに多くの物質に囲まれることで見失ってきたものが、食事やトイレの習慣の違いにはすぐに慣れた。手で食べる食事は本当にモジャだった。トイレは手動の快適ウォシュレットだった。文化や習慣や言葉の違いはすぐに乗り越えられる。その根本にあるものは共通しているからだ。バングラデシュが自分自身を写し出すミラーとなったのは、有り余る物質がない分、人間が生きる上で本当に大切なものが見えやすかったからだと思った。いつでも、蛇口をひねれば水が出て、スイッチを押せば明かりのつく生活のもとでは気付かなかった。人は一人では生きていけないということ。人の明るさと温かさ。井戸の水を協力して使ったこと。一つのランプを囲って歌を歌ったこと。バングラデシュの生活がたくさんのことを教えてくれた。

初めて学校訪問をし、子供たちのキラキラした目に迎えられた時の興奮が忘れられない。彼らを心から愛おしく思い、彼らのために尽くしたいと思った。人を心配し、人を愛することで自分は生かされているということに気づいた。忙しさに流され、有り余る物質に囲まれていた日本での生活、人と人との絆をもっと大切に生きよう。

村の人々、子供たち、そしてBDPのスタッフに『アパールデカホベ』と言ってお別れをしてきた。また必ず、バングラデシュに帰ってきたい。

「バングラデシュに来て『ドンノバット』って何回言ったかな？」

最後のシェアリングの時間、私はこんな風に言ったことを覚えています。バングラデシュで何度『ドンノバット（ありがとう）』という言葉を使ったかわかりません。現地の方々、BDPスタッフの方々、そして日本人メンバー。たくさんの人々に支えられて過ごすことができた2週間、長いようで本当に短い充実した2週間でした。オネック ドンノバット！

たくさんの人や、わずかなモノに感謝して過ごしたバングラでの生活…

手を洗うのを手伝ってもらってドンノバット。

いきなり停電になり、隣の人の懐中電灯を借りてドンノバット。

私たちの訪問を歌やダンスで迎えてくれた子どもたちにドンノバット。

大雨で足場が最悪な中、懸命に力車を漕いでくれたおじさんにドンノバット。

目の前で絞められ、私たちの昼食になったチキンにドンノバット。

しかし、ここまで書いていて気になることが。

「日本で『ありがとう』って言ってないなあ…」

日本は便利だから、何でも1人でできてしまうから、ありがとうなんて言わなくてもすむ…そんなわけがありません。バングラに行っている間も見守ってくれていた家族・友達、気づかないところで自分のために何かしてくれている人々、そして自分たちが生きるために犠牲になっているものがあるってことを常に心にとめておかなければいけないと感じます。またそれを心の中だけでなく、口に出して表現することの大切さも、このバングラでの旅を通して気づかされました。

日本にいたら気づかなかったこと、バングラに行ったからこそ得たものは数え切れないほどあります。こう見ると、豊かさってなんだろうと改めて考えてしまいます。時が経つにつれ、今まで通りの日本の生活に埋もれそうになるけれど、メンバーに会って、旅を思い出し、ベンガルソングを歌い、新たなシェアリングをすることで、自分が少しでも変われたり、日本で新しい発見ができるなら、このSTは大成功だと言うことができると思います。日本には帰ってきたけれど、私のSTはまだまだ終われません！

バングラデシュの光り

西田 愛

いつものように停電の夜。一匹の蛍が私達の集う部屋に入ってきた。あの小さな一匹の蛍の光にどれほど私達は心を奪われただろう。そして、ただ心の底から嬉しかった。

バングラデシュでの日々は今でも何と言ってよいかわからない。見たもの、聞いたもの、嗅いだもの、感じたもの、色々なことが頭のなかで混在している。それは悲しいとか、楽しいとか、感動したといった言葉にするとなんだか、空虚になってしまう気がする。でもその一方で、とても率直に自分のはっきりした気持ちを感じることも多かったように思う。スラムの中の学校は決して良い建物とは言えなかった。嵐で吹き飛んでしまうのではないかと思った。学校のすぐ近くは多くのゴミが散らばっていた。そして心の奥で、この環境で学ぶことを可哀想に思った。そんな考えを持ちながら教室に入ると、子ども達が目を本当にきらきらと輝かせ、満面の笑みでしっかりと握手の手を出し迎えてくれた。不意に涙がこみ上げてくる自分にびっくりした。でもその涙は、彼らが可哀想だからとか、バングラデシュだから出てきた訳ではなかった。それは纯粹にあんなに素敵な笑顔で、心のこもった握手に出会えたという嬉しい気持ちと、自分が彼らやその環境に対して「可哀想」という先入観を勝手に持っていることへの恥ずかしい気持ちによるものだったように思う。あの笑顔で握手をした時、不思議と今まで持ってきた、貧しい環境への、バングラへの勝手な先入観の一切を忘れて、ただただ目の前の一人ひとりと笑顔で心から通じることの嬉しさを噛み締めていた。

私はどこかで、日本とは別世界のバングラデシュや他の貧しい国から、何かを学ぼうと思っていた。でもその意識自体がすでに国境や、様々な社会構造に囚われていたのだと今思う。日本とは切り離された別世界ではなく、私達の生きる延長線上に同じ地球を生きる仲間であるバングラデシュがあり、すべての国があるのだと心から今思う。そしてそれは、きつとたった一人との心通じる出会いから始まるのだと思う。まだ残念ながら自分の中で、これからすべき事は分かっていない。でも他人事ではない意識から生まれる本当の意味での助け合い、「共存」の実現についてもっと考えてゆきたいと思う。

一匹の小さな蛍の光は本当に美しかった。もしも電気で明るい部屋だったら、きつとあの身近な、小さな美しい光に気づくことも、感じることも出来なかっただろう。私にとってバングラデシュでの日々があんな小さな蛍そのものだった気がする。本当はもっと身近に、もっとシンプルな生活の中にこそ、何にも代わらない光があるのかもしれない。

「私達が豊かな生活をする事と、彼らが貧しいままでいることは同じ事を意味している。」そんなことをふと考えながらも、今日もエアコンの効いた部屋でビールを飲みながら、以前と変わらぬ「今日」という、私達の考える「日常」を過ごす。

ノモシュカール。アマール ナム কামিলি কেモナチェン?

バングラでの2週間は本当に本当に楽しくて、毎日が幸せだった。たったの2週間だったが、日本での2週間では到底学べないようなことを学び、考え、感じる事ができた。

毎日子どもたちのまっすぐでキラキラとしたまなざしに出会った。教室での次は何をするの、という好奇の目。「アブラハム」を歌って踊ったときの、恥ずかしがりながらも、いきいきとした目。そのままざしに答えたい、答えようと思いつけた。

毎日の礼拝とシェアリングはとても好きなひと時だった。みんながどういふことを感じ、考えたのか聞けること、また私のことを聞いてもらえることが本当にうれしかった。

ネトロナ滞在中、ヘモントさんがたくさんの歌を教えてくださいました。毎日歌を歌っていた。その時間がとても楽しかった。もうあの時は帰ってこないのだと思うとさみしい。ふっと口から出てくるのはいつも、バングラで覚えた歌。歌うことで、バングラで過ごした日々を思い出することができる。

バングラで2つの出会いがあった。1つはヒンドゥー教徒のコミュニティを訪問したときのある母親との出会いだ。彼女には1歳8ヶ月の赤ちゃんがいて、歳はたったの16歳だった。つまり赤ちゃんを産んだのは14歳くらいである。そのことに大変ショックを受けた。早くから結婚をして、子どもを産むという事実は知っていたけれど、実際に会って、話をすると急に現実を突きつけられたようだった。彼女は常にこやかにほほ笑んでいて、私のことをとても気遣ってくれた。そして、自分の子どもを大切にしていた。そんな彼女の姿に胸をうたれた。どうしてそんなにやさしいの。たくさんの「どうして」が頭の中を駆け巡った。私は16歳のときどんな生活をしていただろう。そう思うと恥ずかしくなった。彼女はどんなことを考えながら生活しているのだろう。

もう一つの出会いは、ネトロナで出会った、10歳のルジナという女の子だ。彼女は私たちが宿泊したところで、私たちが来るということで、学校を休んで子守と家事をしてくれていた。まじめに言われたことをきちんと行っている姿を見て、家でなんでも親にしてもらって自分が情けなくなった。メンバーの様子を気遣ってくれて、少しでもいつもと様子が違うと「オシュビダ？」と心配してくれた。一緒に歌を歌ったり、折り紙をした時の楽しそうな様子が今でもよみがえってくる。ベンガル語のつたなさのせいで、言えなかったこと、聞けなかったことがたくさんある。もう一度会ってルジナともっと話をしたい。

共同生活をすることで、またBDPスタッフの温かいもてなしの中で、「感謝」について考えさせられた。感謝ってとても大切なものなんじゃないか。なんでもやってもらって当たり前だと思っていないか。「感謝」は今まで私の中から抜け落ちていた。バングラでそれに気づかされた。感謝すること、されることの心地よさを感じた。これからは大切に「ありがとう」という言葉を使おうと思う。

日本へ帰ってきてからバングラでの生活を振り返り、感じる点がいくつかある。

まず、細かいことをごちゃごちゃと気にせんでもええんちゃう、と思うようになった。これはバングラでどんなことにも「オシュビダ ナイ」と言っていたからだろう。今でも「オシュビダ ナイ」とよく心の中でつぶやく。また、他人のことをとやかく言うのをやめようと思うようになった。それも「オシュビダ ナイ」の姿勢から来るのかもしれない。

もう一つは、日本では特に忙しくないのに、自分では忙しいとっていて、思い返しても記憶に残っていないが、常にあせっているような生活を送っていたことをあらためて感じた点だ。バングラへ行ってそんな日本の生活を振り返り、忙しいを言い訳にするのは止めようと思った。

また、日本へ帰ってから日が経つほど、元の生活に戻ってしまい、バングラで感じたこと、決心したことを忘れそうになってしまう。それを思い出させてくれるのが、この旅をともにすごしたメンバーである。帰ってから感じていることを共有することで、バングラで過ごした日々がよみがえってくる。

毎日バングラでの日々を思い出し、メンバーがどんな生活をしているのか気になり、バングラで私の頭は埋め尽くされている。今回の旅をともにしたみんな、バングラで出会った方々が私の心の支えだ。

バングラが大好きだ。バングラのすべてが愛おしい。バングラと出会えたこと、それによってたくさんの人と出会えたことに、感謝します。オネーク オネーク ドンノバッド。

バングラデシュの旅

東京女子大学1年 田中衣里

大学生になってはじめての夏休み。今までの自分だったら、ただ遊んで、寝て、食べて、寝て…そんな猛然と過ぎていく毎日を送っていたに違いない。バングラデシュに行き、2週間という長いような短い時間をバングラデシュで過ごし、今こんなにバングラデシュを恋しく思う自分なんて、ほんの数ヶ月前の私は想像もしていなかった。

私は18年間日本の外に出たことがなく、バングラデシュが私にとっての初の海外であった。日本ででの日常生活にすっかり慣れ、それが当たり前だと思って生きてきてしまった私は、バングラデシュの雰囲気・人・日本とのギャップにのまれてしまい、恥ずかしながら最初の数日は、バングラデシュに来て何かを感じよう、何かを学ぼうという積極的な姿勢になることができなかった。そんな自分がすごく情けなかったし、自分自身の弱さを痛感させられた。しかし、BDPの学校を数多く訪れ、現地の人々と触れ合い、BDPスタッフのみなさんや一緒に行った友達の一生懸命な姿を見たり、夜のシェアリングでみんなの感じたことや意見を聞いたりしていく中で、自分がこのスタディーツアーに参加した目的を改めて考えさせられ、初心にかえったというか、自分につきまわっていたいろいろなもやもやがなくなっていった。そんなことを毎日つけていた日記に書いた翌日からは、バングラデシュの好きなところをたくさん見つけることができたし、子供たちが本当にかわいく愛しく思えた。おかれた環境に関わらず、気持ちの持ちようで状況は大きく変わるものであると実感した。また、バングラデシュにいて『感謝』することが多かったように思う。私たちをいつも気にかけてお世話してくださったBDPスタッフのみなさん、温かく迎えてくださった地域の人々、輝く笑顔で私たちに大切なことを気づかせてくれた子供達、2週間共に生活し助け合った仲間達、私の希望を応援して、日本から心配してしてくれた友達や家族…。多くの人の力があってこそ、自分がこのような貴重な経験ができたということ、本当に感謝します。バングラデシュで感じたこと、経験したことを、今まで当たり前と思って生きてきたこの日本で決して風化させぬよう、また今後の自分の生き方を考える大切な糧となるよう、後は自分次第、毎日をしっかり生きようと思う。最後に、この経験を大学1年の今できたこと、本当に幸せに思います。ドンノバット！
(^ω^*) シェシュ。

毎日笑って、毎日歌って、毎日本当にたくさんの子と遊んで、こんな幸せな2週間は初めてだったかも。日本に帰ってからも写真や日記を見ながらバングラデシュのことばかり考える日々が続いています。バングラデシュに恋をしているみたいに。豊かな自然、温かい人々、きらきらした笑顔の子どもたちに囲まれて過ごした2週間は本当に幸せでした。

でも、私にとってこの旅は楽しいことばかりではありませんでした。初めてみる物乞いの人々に衝撃を受け、最初は恐怖さえ感じてしまいました。生活や環境の違いに戸惑いました。シャボン玉をきっかけに、自分の子どもたちとの接し方に疑問を抱きました。

『何しに来たのだろう』『私に何が出来るのだろう』

自分の性格や、考え方、無力さに愕然としました。

日本に帰ってから「逆カルチャーショック」を受けました。私も含めて日本は娯楽を知りすぎてしまったのではないかとすら思ったほど。電気もガスも水道も普通ですから。それって当たり前じゃないんです。きつと。そういうものが当たり前の世界でしか生きていなかった。自分ちっちえーなって思いました。

経済面や衛生面でバングラデシュにないもの日本はたくさん持っていると思います。でも、日本にないもの(もしかしたら昔は持っていたのかもしれないけど)バングラデシュにはたくさんありました。たくさん星を見て喜ぶ、蛍を見て喜ぶ。人に優しくされて、笑顔をもらって、助け合うことが出来て、意見を交換することが出来て、ほとんど会話出来ないのに友だちになれる、そういうたくさん喜びの中にいたから幸せだったんです、わたし。人に優しくされたり、笑顔をもらったり、友だちになれたり、それは日本でもあること。そういう喜びさえ自分の中で当たり前になってしまっていたのかもしれない。考え方次第で、人生って変わるんだなって思います。喜びを喜ぶことが今私が考える幸せです。

『何しに行ったのだろう』

バングラデシュの自然、音楽、文化、人を知るためだったんだと思います。そしてバングラデシュを好きになる。

『私に何が出来るのだろう』

分からないけど、考えつづけます。ずっとずっとずーっと。バングラデシュでのスタディツアーは終わってしまったけれど、日本でのスタディツアーはずーっと続いていくのだと思います。

たくさん子どもたち、BDPのスタッフのみなさん、メンバーの皆と出会えたことは私の宝物です。オネークオネークドンノパッド！！これからもよろしくね、バングラデシュ-----。

ACEF スタディツアーを終えて

高杉 春輝

「春輝、バングラデシュに行ってみない？」
衝撃的な一言から始まったスタディツアー。
僕はバングラデシュという国に行く羽目になった！！
初めての海外がバングラデシュ！？
まっいいか」とあまり深くは考えていなかった。というか想像が出来なかった。
治安は？衛生面は？と周りのほうが心配していた。
僕だけ高校生だし大丈夫かなと思っていた。
いざダッカに着いてみたら物乞いの子供たちに囲まれ緊張と恐怖すら感じた。
二週間が不安になった。
でも、バングラデシュで貧しくても目をキラキラ輝かせている子供たちとふれあっているうち何かすごい宝物を見つけたような気持ちになってきた。
同じ地球に生まれ同じ空気を吸っていても、こんなにも違うのだろうか・・・
改めて考えさせられた。
僕は又、日本へ戻る。
携帯・パソコン・コンビニと当たり前便利な生活へ戻る。
せっかくのバングラデシュでの想いや経験を生かせるように成長していきたい。
一緒に行ったメンバーの皆さん本当にお世話になりました。
又会えるのか二度と会えないのかわからないバングラの人達・・・
僕は一生忘れないからね！

～ベンガルティの入れ方～

バングラのどこに行ってもおいしいベンガルティが出てきます。
そんなベンガルティを気軽に楽しめるレシピ。
砂糖は多いほうがおいしいですが、甘さや濃さはお好みで…。

ACEF 秘伝スパイスティ (2~3人分)

<材料>

ベンガルティ茶葉小さじ2杯、水200cc、牛乳200cc、シナモン1片、カル
ダモン1/2粒

<手順>

1. 鍋に水200ccと、細かく手でちぎったシナモン1片とカルダモン1/2粒を
入れ、沸騰させる。
2. 沸騰したら中火にし、紅茶葉小さじ2杯を入れて濃いめに再沸騰させたら、
牛乳200ccを加え、さらに加熱する。
3. 沸騰する直前に火を止め、砂糖20gを加えてよく混ぜる。
4. 茶漉しでこしながらカップに注ぐ。

簡単！フーバイル式ミルクティ

1. ベンガルティをいれる。
2. コンテンスミルクを加える。砂糖をプラスするとなおおいしい。

ジンジャーティ

1. ティポット (or 急須) にベンガルティをいれる。
2. 1の中に生姜(おろしたものを、あるいはスライスしたものを)を適量加える。
3. 数分待つてカップに注ぐ。
お好みで砂糖をいれて召し上がれ。

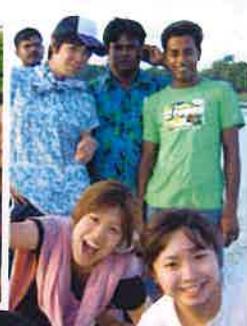
編集後記



(写真上・中) 第一回編集会議にて。
日本に帰国して初めてのメンバーとの再会。みんなが洋服を着ていて、舗装された道を歩いている…。なんだかおかしくて笑ってしまいました。同時に、思い出を話したことでバングラでの生活がいかにすばらしい経験だったかを改めて実感しました。

(写真下) ACEF の事務所にて。
メンバーのみんな、報告書作成に協力してくださりありがとうございました！
この冊子が今回のスタディツアーの記録として、新たにスタディツアーに参加するかたの参考として、また少しでも多くの方がバングラデシュを知るきっかけとして、役に立ってくれたら嬉しいです。





Bangladesh に寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。



会員募集

個人会員	年額1口	5,000円
団体会員	年額1口	50,000円
学生会員	年額1口	2,000円
一時寄付	随時	金額自由

郵便振替 00100-0-185540

特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-26

TEL. & FAX. 03-3208-1925

E-mail: acef@acef.or.jp

http://www.acef.or.jp